

## ふたりの人

(ベタニアのマリアとイスカリオテのユダ)

### ルカ福音書22:1-6 (新改訳2017訳)

22:1 さて、過越の祭りと言われる、種なしパンの祭りが近づいていた。  
 22:2 祭司長、律法学者たちは、イエスを殺すための良い方法を探していた。彼らは民を恐れていたの  
 である。  
 22:3 ところで、十二人の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った。  
 22:4 ユダは行って、祭司長たちや宮の守衛長たちと、どのようにしてイエスを彼らに引き渡すか相談  
 した。  
 22:5 彼らは喜んで、ユダに金を与える約束をした。  
 22:6 ユダは承知し、群衆がいないうちにイエスを彼らに引き渡そうと機会を狙っていた。

### 【祈りながら考えよう】

- (1) ベタニアで、イエスの頭にナルドの香油を注いだのだけですか。それは何のためですか。
- (2) 香油を注いだことに憤慨したのはだれですか。なぜ憤慨したのですか。
- (3) ユダが抱いていたメシヤ観に、イエスの発言・行動が合わなくなったのはいつ頃ですか。

### 【解説】

受難週の第4日水曜日の出来事、それがルカ22章1-6節のここに当たるが、マタイ、マルコ、あるいはヨハネの福音書を見ると、ルカ福音書にだけ無い重要な出来事がある。それを補いながらこの所を学びたい。

#### ① イエス、ベタニアで油を注がれる

ナルドの香油の出来事はルカ福音書に無い所である。マタイ福音書では26章6節以下にある。マルコ福音書では14章に記されている。そこを読む。

#### 《マルコ福音書14章1-11節》

14:1 過越の祭り、すなわち種なしパンの祭りが二日後に迫っていた。祭司長たちと律法学者たちは、イエスをだま  
 して捕らえ、殺すための良い方法を探していた。  
 14:2 彼らは、「祭りの間はやめておこう。民が騒ぎを起こすといけない」と話していた。  
 14:3 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられたときのことである。食事をしてお  
 られると、ある女の人が、純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエス  
 の頭に注いだ。  
 14:4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。  
 14:5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そして、彼女を厳しく責めた。  
 14:6 すると、イエスは言われた。「彼女を、そのままにさせておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのた  
 めに、良いことをしてくれたのです。  
 14:7 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むとき、いつでも彼らに良いことをしてあ  
 げられます。しかし、わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。  
 14:8 彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。  
 14:9 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、  
 この人の記念として語られます。」  
 14:10 さて、十二人の一人であるイスカリオテのユダは、祭司長たちのところへ行った。イエスを引き渡すため  
 だった。  
 14:11 彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすればイエスをうまく引き渡せるか  
 と、その機をうかがっていた。

ヨハネ福音書では12章にある。ルカ福音書にはないナルドの香油の記事が、他の3つの福音書にはある。マルコによる福音書によってこれを補って読んでゆきたい。

宝石商がダイヤモンドを黒いピロードの上に乗せるように、聖霊に導かれた著者マルコは、宗教的権力者とユダの腹黒い陰謀の合間、主に対するひとりの女性のすばらしい愛を巧みに強調している。

3つの福音書を読むことによって、イエスがベタニアにおいてになった時のことであることがわかる。イエスは受難週の間、だいたいベタニアに宿って、朝早くエルサレムに行き、夕方またベタニアに帰るといのが毎日のようであった。時にはベタニアに帰らないで、オリーブ山で一夜を過ごす時もあった。

《ツアラアトに冒された人シモン》は、救い主に敬意を表して祝宴を催した。いやされたことに対する感謝の気持ちだったのかもしれない。

#### (2) マリア、香油をイエスの頭に注ぐ

##### ①ナルドの香油300グラム

イエスがここで食卓についておられた時に、一人の女、ヨハネによれば、それはマリアである。その女が非常に高価で純粋なナルドの香油が入っている石膏のつぼを持って来て、これをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけたとある。《ナルドの香油ーリトラ(300グラム)》と言われている。

ナルドの油は高価な香油である。女の持ち物として宝物のように珍重される、尊ばれる持ち物である。おそらくマリアにとっての全財産であったであろう。この香油のつぼをイエスの所に持って来た。

そしてこれを全部イエスの頭に注ぎかけたというのである。つぼから、一滴二滴と注ぐのではなく、つぼをいきなり壊してしまふ。一滴残らず全部をイエスの頭に注ぎかけた。

##### ②感謝の心が一杯のマリア

マリアの心は、イエスに対する限りない感謝をそのまま表している姿である。マリアの心はだれにもわからなかった。ただイエスだけがおわかりになった。イエスの弟子たちのだれにもわからなかった。彼女は、救い主にこの香油をささげるまたとない機会が来たことをはっきり知っていた。

主はまもなく死なれ、葬られようとしていた。マリアは優しさや親切を示せるうちに示そうとした。主のご遺体に何かをしてあげられるかどうかはわからなかったため、彼女は主が生きておられるうちにその愛を示そうとしたのである。

#### (3) マリアの行動に憤慨する弟子

##### ①浪費と考える弟子たち

《何人かの者》は、マリアの行為をとんでもない浪費だと考えた。「何人かの者」というのは、マタイ福音書を見ると、弟子たち、十二人の弟子たちである。中でも一番これをなじり、腹を立てたのがイスカリオテのユダであった。ヨハネ福音書に、そのことが記されている。

人間の分別からすれば、マリアのしたことは無茶苦茶である。香油というものは一滴二滴と用いていくもの、そこに真の使い方がある。一滴二滴、体につけても注いでも、その良き香りは全身を覆い、またそのまわりをにおわす。それなのに石膏全部、まるで灯油を使うかのように、この高価なおい油を、なんて無駄な使い方をするのか。

《この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに》。それは、分別ある者の言葉である。1デナリは当時の労働者1日分の賃金である。《300デナリ》は労働者の年収に等しかった。

##### ②マリアのしたことを喜ばれたイエス

イエスはこのマリアのした事を心から喜んで、これを無駄として腹を立てた弟子たちの態度を叱責された。このことがイスカリオテのユダの心を、決定的に刺激する出来事になった。そしてイエスに対し離反する出来事になった。

#### (4) 強い人、イスカリオテのユダ

##### ①ユダの心にあったメシヤ観

前々からユダの心の中には、イエスに対する批判が心の深くに潜んでいた。最初からそうであったわけではないが、途中からイエスが自分の思ったような存在ではないということに気がつきはじめた。

他の弟子たちもそうである。彼らがイエスに従ってきたその動機は、皆当時のユダヤ人流のメシヤ観をもってであった。キリストはこの地上にあってことを成し遂げるお方。たとえ苦難の道は通られても、ついにはこの地上にあって王となり、異邦人の支配下にあるこの民を解放して、独立した神の国を実現なさる。そのように期待をかけていた。

##### ②イエスに対する批判の心

しかし、約3年間イエスに従って来るうちに、イエスの方向がそうではないということがだんだんわかってきた。特に最近イエスは、自分は苦難を受けて死ぬということと言われた。そんなことはとても考えられることではない。ペテロも1度それをたしなめて、イエス様に怒られたことがある。《サタンよ。退け》と。

この人こそキリストだと信じてついてきたことが、間違っていたのではないか。たしかに力あるわざをなさる。すばらしいことをお語りになる。今まで現れたことのないお方である。神からのお方である。そういうふうに見える。しかし同時に、その方向がどうもおかしい。自分たちが願っているような方向と違う。そんな批判が、イエスに従って来るうち、イスカリオテのユダの心の中に濃くなってきた。

##### ③意志強固なユダ

他の弟子たちにもそういう疑いが起こらないわけではない。しかし他の弟子たちは、イスカリオテのユダのように、己というものが強くなかった。イスカリオテのユダは、意志が強い人。自分がこう考えたことは変えることが難しい。

それに対して、他の弟子たちは迷いやすい存在であった。疑いはあっても、決定的にイエスを批判するという態度には出られなかった。つまずきながらも、よろめきながらも、ともかくイエスについていく他なかった。

しかしユダは強かった。自分が心に持ったものを、容易に動かすことはできない。どこまでもそれに立って見てきた。そして彼のイエスに対する批判を決定的なものにさせたのが、このベタニアの出来事であったようである。その直後に、ユダは決心して敵の所に走っている。人間にとって意志が強固であり、思ったことは曲げない、ということは結構なことだが、しかしそれが信仰の世界、キリストとの関係においてである時には、まことに不幸なことになる。

